

司書資格と図書館に関する知識・モチベーションの関係

辻 慶太*, 芳 鐘冬樹*

Effect of Japanese Shisho Librarian Certification: Knowledge and Motivation

Keita TSUJI, Fuyuki YOSHIKANE

抄録

司書資格の有無と図書館に関する知識及び仕事へのモチベーションの関係を明らかにする為、本研究では司書資格を持ち／持たずに、図書館に勤務している者／勤務したことがない者、の4グループ計700名にインターネット調査でアンケートを行った。結果、図書館の知識に関しては、司書資格を持たない図書館員は基本的な用語すら知らないことが明らかとなった。例えば「レファレンスサービス」「OPAC」「相互貸借」という用語に対し、彼らの半分は「聞いたことがない」と答え、「納本制度」「書誌ユーティリティ」という用語に対しては8割近くが「聞いたことがない」と答えていた。司書資格を持つ図書館員にそのような傾向は見られなかった。モチベーションに関しては、現在の仕事を「できるだけ長く続けたい」と答える者は司書資格を持つ図書館員では6割近くに達するのに対し、持たない図書館員は3割にとどまった。また図書館情報学の検定試験や専門職大学院への関心でも大きな差が見られ、全般に資格を持つ図書館員は持たない図書館員よりも図書館に関する様々な知識を持ち、仕事に対するモチベーションも高いことが示された。今後の図書館員配置において参考にすべき結果と思われる。

Abstract

In Japan, Shisho is a representative and almost only certification for librarians. But Shisho certification (henceforth SC) is not made much of by libraries or parent organization of them (such as local public entities) and about a half of FTE public librarians do not have SC. Is SC really useless or meaningless? Based on these backgrounds, we conducted a survey to see the effect of SC. We asked (1) knowledge for librarians and (2) motivation for their jobs to four types of people: librarians with and without SC, and non-librarians with and without SC. The total number of respondents is 700. It was shown that librarians with SC knew the library related terms and were confident in database searching. On the other hand, the librarians without SC did not know basic terms such as "reference service", "OPAC" and "ILL" and their knowledge seem to be as less as ordinary people. As for the motivation as librarians, our results showed that many librarians with SC wanted to continue their jobs and wished to improve their knowledge, while not a few FTE librarians without SC did not want that. If all the other conditions are the same, the libraries and their parent organization should preferably place people with SC in libraries.

* 筑波大学大学院 図書館情報メディア研究科
Graduate School of Library, Information and Media Studies,
University of Tsukuba

1. はじめに

司書資格は日本の図書館員に関する数少ない資格の一つであるが、現状では図書館あるいはその設置母体からあまり重視されておらず、司書資格を持たずに図書館で勤務している者も多い。例えば『日本の図書館2009：統計と名簿』によると、2008年4月現在公共図書館の正職員の数は12,699人であるが、その中で司書資格を持つ者は6,458人ととどまる¹⁾。司書資格は図書館員にとって有用ではないのか？本研究の第一の目的は司書資格を取得することが図書館員の知識やモチベーションにどのような影響を与えるかを数量的に明らかにすることである。本研究によって、司書資格を持つ者の方が持たない者より図書館員としての知識やモチベーションが高いことが明らかになれば、図書館関係者は前者を積極的に図書館員として採用するという判断・決定を行うことができる。それによって図書館サービスの一層の充実が見込める可能性が高い。本研究の第二の目的は、図書館員にならなかった者に対して司書資格はどのような影響を与えたのかを明らかにすることである。近年では毎年12,000人以上の学生が250以上の大学で司書資格を取得しているが、図書館員になる者は1%程度に過ぎない²⁾。図書館員にならずに司書資格を取得した者は非常な人数にのぼり、彼らがどのような知識を身に付けたか、あるいは付けなかったかは図書館情報学の教育関係者にとって有用な情報である。

さて司書資格に限らず一般に資格は次の効果・影響を取得者に与えると思われる。即ち、(1) 知識の獲得、(2) 継続的な学習姿勢やモチベーションの強化、(3) 能力証明の獲得、(4) 就職や待遇面での優遇、(5) 全般的な満足感の増加、(6) 資格関係の職業の選択、などである。もちろんこれらは独立したものではなく、一方が他方の原因になることも多い。まず(1)(2)について述べると、資格取得に向けた学習を通じて専門的な知識が身に付く。また実務だけでは偏りがちな知識も、資格取得に向けた学習によって体系的なものとなる。知識の体系・枠組みを身につけることで、その後に触れる個別の知識もよく整理でき、興味が喚起されて継続的な学習姿勢や仕事に対するモチベーションを強化することができる。(3)の能力証明としては、顧客や職場の同僚に対して、自分が持つ能力をある程度客観的に伝えることができ、周囲の信頼を早く得ることにつながる。結果として仕事が進むことになるだろう。(1)(2)(3)が総体として(4)に、さらに(5)に結びつく。(1)～(5)

はいわばプラスの影響であり、資格取得の効果とも言えるものだが、中立的な影響として(6)がある。即ち、主に(3)～(5)のような効果が見込めることから、取得者はその資格に関係した職業を選択しやすくなると思われる。

上の(4)(5)(6)については筆者らの研究が既にある³⁾。そこで本研究では(1)と(2)に焦点を当てたい。即ち、司書資格は取得者に図書館に関する知識をもたらしたか、継続的な学習姿勢やモチベーションをもたらしたか、などを数量的に明らかにしたい。もちろん資格取得との因果関係を厳密に証明することは困難だが、以下の4グループの比較、特に(a)(c)の比較を中心としながら(b)(c)、(b)(d)の比較を通じて、資格取得と各種属性との共変関係を明らかにし、影響の実像に迫りたいと考えている⁴⁾。

- (a) 大学を卒業し、司書資格を持ち、かつ図書館に現在勤務している者
- (b) 大学を卒業し、司書資格を持ち、かつ図書館に勤務したことがない者
- (c) 大学を卒業し、司書資格を持たず、かつ図書館に現在勤務している者
- (d) 大学を卒業し、司書資格を持たず、かつ図書館に勤務したことがない者

ここで「大学」とは短期大学及び四年制大学を指す。また「司書資格」とは図書館法第五条に基づくものを指す。「図書館」とは、国立国会図書館、都道府県立及び市区町村立図書館、大学図書館、小中高の学校図書館を指す⁵⁾。「勤務」の形態としては、正規職員、非常勤職員、臨時職員、パート、アルバイトを考える。なお簡略化のため以下では「図書館に勤務したことがない者」は「一般人」、「図書館に勤務している者」は「図書館員」と表すことにする。

本論文は次のように構成されている。まず第2章で関連研究についてまとめ、第3章で調査方法についてまとめる。第4章で結果を提示し第5章で考察を行って、第6章で総括する。

2. 関連研究

図書館員や一般人に対する司書資格の有効性を明らかにすることは、先述のような意義・有効性を持っているが、先行研究はほとんどない。国立教育政策研究所社会教育実践研究センターは公共図書館員の現状に関する大

規模な調査を行ったが、そこでの対象は司書資格を持つ者に限られている。資格を持たない者との比較は行われておらず、その意味で司書資格の有効性などは明らかにされていない⁶⁾。また大阪府における公共図書館員の性別・年齢・勤務年数などを調べた調査もあるが、そこでも司書資格の有無は考慮されていない^{7) 8)}。大学における図書館情報学教育のあり方に関しては、LIPERをはじめ様々な論考がある^{9) 10) 11) 12) 13) 14) 15) 16) 17)}。だが司書資格を取得した者に焦点を当てた実証的な追跡調査は、先述の辻らの研究を除いてほとんど行われていない。辻らは、司書資格を取得し図書館員にならなかった者には、図書館以外に勤める非正規職員が多く、年収は一般人より低く、現状に満足していないこと、一方司書資格を取得し図書館員になった者には専門的業務に従事する者が多く、年収は低いながらも現状に非常に満足していることなどを示している¹⁸⁾。

司書資格取得者あるいは図書館情報学教育に関する関連研究は以上とし、以下では調査手法としてのインターネット調査の位置付け・妥当性に関する研究を取り上げる。近年、プライバシーやセキュリティ意識の高まりを受け、従来の社会調査手法は見直しを迫られている。郵送調査や玄関先等での面接調査の回収率は低下しつつある¹⁹⁾。サンプル抽出に用いられてきた住民基本台帳は、閲覧を制限されるケースが増えている。また玄関先で見知らぬ調査員に数十分間対応できる回答者は、現代のセキュリティ意識に照らすとあまり一般的な人間ではなく、彼らを主要な回答者にすることは結果として偏ったサンプリングにつながる可能性も指摘されている²⁰⁾。そのような中、インターネット調査（あるいはWeb調査、ネットアンケート）は大規模サンプルを迅速・低コストで確保できる点で注目を集めている。ここで言うインターネット調査とは、調査会社が全国からモニターを募集し、ネットを介して回答してもらう調査形態を指す（インターネット調査の分類はOhsumi & Yoshimura²¹⁾、吉村²²⁾、大隅²³⁾に詳しい。彼らの分類によると本研究の手法は「属性絞りこみ方式」に該当する）。インターネット調査については回答者に偏りがあるという指摘もある。例えば本多 & 本川²⁴⁾は、インターネット調査の回答者には、面接調査の回答者に比べて、高学歴、専門・技術職が多く技能・労務職が少ないこと、正社員が少なく非正規従業員が多いこと、労働時間の短い者が多いこと、などを指摘し、さらにインターネット調査回答者には、郵送調査回答者に比べて、就業状態にある者が多く、有配偶者が少ないこと、インターネットを高頻度で利用する者が多いこと、なども指摘している。さらに大隅はモ

ニター登録者と実際の回答者を調べ、後者は前者を代表していないとしている²⁵⁾。だが先述の社会状況と簡便さを受けて、インターネット調査はリサーチ業界や学術分野でも利用され始めている。例えば内田²⁶⁾はマーケティング・リサーチ業界の調査手法別売上高構成比において、インターネット調査は1999年度では全体の2%に過ぎなかったのが、2002年度には13%に急増したと報告している。また森田ら²⁷⁾は歯科に関する用語の認知度を、大野ら²⁸⁾は目のかゆみの実態をインターネット調査で調査している。

本研究に郵送調査や面接調査を用いることは不可能ではないが、非常にコストがかかる。またそれによって得られたサンプルが偏っていない保証は無い。インターネット調査によるサンプルも偏っている可能性はあるが、偏りがあっても、本研究は司書資格を取得した者と取得しなかった者の両方を同じ手法で調査する、いわば同じ土俵の上で両者を比較するものである。従ってそこで得られた異同には一定の意味があると考えられる。さらに近年のインターネットの普及を受け、回答者の偏りは従来より緩和されている可能性もある。以上のことから本研究ではインターネット調査を手法として採用する。

3. 調査方法

本研究の調査ではYahoo!リサーチ²⁹⁾のインターネット調査を用いた。まず第一段階としてモニターに予備調査を行い、第1章で述べた4グループに当てはまる者を選別し、本調査を行った。以下ではそれぞれについて詳述する。

3.1 予備調査

予備調査では250,000人に対して2008年1月18日～20日に、(x)取得している資格、(y)図書館での勤務体験、(z)最終学歴、に関する3つの質問を行った。まず(x)については「あなたが既に取得した資格を選んでください」と質問し、司書、公認会計士、教員免許など23個の選択肢を提示した。次に(y)については「あなたは短大・大学卒業後「図書館」に職員（パート・アルバイト・派遣職員なども含みます。ボランティアは含みません）として勤務をしたことがありますか。※ここで「図書館」とは大学図書館、小中高の学校図書館、国立国会図書館、都道府県立あるいは市区町村立図書館を指します」と質問し、(1)以前勤務したことがあるが、今は勤務していない、(2)現在勤務している、(3)これま

で一度も勤務したことがない、という3つの選択肢を提示した。最後に (z) については「あなたの最終学歴をお答えください。現在高校・専門学校・短期大学・四年制大学在学中の方は「現在在学中で卒業していない」を選んでください」と質問し、(i) 高校卒業、(ii) 専門学校卒業、(iii) 短期大学卒業、(iv) 四年制大学卒業、(v) 大学院在学中・修了、(vi) 現在在学中で卒業していない、(vii) その他、という7つの選択肢を提示した。結果、110,782人が回答し、有効回答数は103,618であった。

さて上記3つの質問において、質問(x)で「司書」を選んだ者と選ばなかった者³⁰⁾、質問(y)で選択肢(2)(3)を選んだ者、質問(z)で選択肢(iii)(iv)(v)を選んだ者に対して、次節で述べるサンプル調整を行い、本調査の対象とした。

3.2 サンプル調整

本研究では1章で述べたグループ(a)と(c)の比較を中心に、グループ(b)(c)と(b)(d)の比較を行うが、それぞれのグループの性質に違いをもたらすと思われるいくつかの属性については最初からコントロールする方針を採った。それら属性は、性、年齢、短大卒か四大卒か、文系か理系か³¹⁾、の4つである。例えば、司書資格を持つ者は持たない者に比べ、相対的に文系出身の女性が多い。従って(b)グループと(d)グループの間に何らかの差異が観察されたとしても、それは司書資格の有無の為というよりは、単に(b)グループの方に女性が多い為という推論も成り立つかもしれない。そこで、司書資格を持たないグループ(c)、(d)に関しては、それぞれの比較対象であるグループ(a)、(b)と上記4属性が同じ構成比になるように回答者を無作為抽出し、調査対象とすることを試みた。例えばグループ(d)(このグループには98,959人がサンプルとして存在し、従ってそこから4属性に関し希望の構成比になるようサンプルを無作為抽出することは十分可能であった)における女性や短大卒の割合は、グループ(b)におけるそれらと同じ値にする。このようにして上記4属性が(b)(d)それぞれに与える影響を等しくすることで、「司書資格の有無」という属性の影響を相対的に見やすくするのである。ただし予備調査の結果、グループ(c)は上記のような構成比調整にたえるほどサンプルが得られなかったため、(c)については調整を行わず、全員をサンプルとした。もっとも後述するように上記4属性に関して(a)と(c)に大きな違いはなかった。従って両グループの差異は上記4属性以外に起因すると推論することができる。後述のように本研究ではそこに司書資格の影響

を見るという立場を取る。

さてサンプル調整によって851名を調査対象に選び、彼らに本調査への参加を呼びかけたところ、708名が回答し、有効回答数は700であった。本調査の対象となったグループ(a)～(d)の人数はそれぞれ(a)137、(b)114、(c)124、(d)325であった。

4. 結果

以下では、アンケート回答者の基本属性について述べた後、図書館員としての知識及び仕事に対するモチベーションの結果を述べる。

4.1 基本属性

先ほど司書資格を持たない一般人(=グループ(d))については司書資格を持つ一般人(=グループ(b))と性、年代、短大卒か四大卒か、文系か理系か、の構成比が同じになるように回答者を無作為抽出し、調査対象とすると述べた。調整に用いたこれら4属性の調査結果は表1のようになった(以下、表における“N”は回答者数を表すものとする)。

まず性別については、表1上段に示したように、司書資格を持つ一般人には女性が多く、全体の86.8%を占めた。司書資格を持たない一般人のサンプルはこの性別構成比に基づいて抽出されている。即ち、司書資格を持たない一般人における女性の割合88.0%は、司書資格を持つ一般人における86.8%に基づいてサンプル調整された結果である。

表1 回答者の性別・年齢・学歴・理系/文系の別

	司書資格を持つ図書館員	司書資格を持つ一般人	司書資格を持たない図書館員	司書資格を持たない一般人
男性	22.6	13.2	25.0	12.0
女性	77.4	86.8	75.0	88.0
20代	35.8	23.7	35.5	24.9
30代	49.6	47.4	46.8	47.4
40代	14.6	28.9	17.7	27.7
短大	21.2	29.8	24.2	32.3
四大				
廣應義塾大学	4.4	0.0	2.4	1.2
図書館情報大学	2.9	1.8	0.0	0.0
その他	66.4	66.7	66.9	63.4
大学院	5.1	1.8	6.5	3.1
理系				
理学系	2.2	0.0	0.8	0.3
工学系	3.6	0.9	3.2	1.5
農学系	1.5	0.0	0.0	0.3
医学・薬学系	0.7	0.9	1.6	0.3
文系				
法学系	5.1	3.5	7.3	4.9
政治学系	1.5	0.0	1.6	1.2
経済学系	4.4	1.8	8.1	8.0
経営学系	2.9	0.9	7.3	9.8
社会学系	2.9	7.9	4.0	7.1
教育学系	8.8	3.5	16.9	9.8
文学系	54.0	62.3	29.8	29.8
家政学系	1.5	3.5	4.8	10.2
美術系	1.5	0.9	2.4	3.1
図書館情報学系	7.3	7.0	0.8	0.3
その他	2.2	7.0	11.3	13.2
N	137	114	124	325

年齢に関しては表1中段のようになった。一般人・図書館員に関しては、4グループとも30代に構成比上のピークが現れている。これは現実の図書館員等の年齢構成比と乖離しているという点で、今回のアンケート手法による偏りと考えられ、調査手法の限界を示していると言える。

さて表1から司書資格を持つ/持たない図書館員の間で性別、年齢、短大卒か四大卒かの割合に大きな差はないことが分かる。さらに司書資格を持つ図書館員の間で理系出身の者は8.0% (= 2.2 + 3.6 + 1.5 + 0.7%)、持たない図書館員の間では5.6%であること、両者に有意な差はないことも分かる。従って以下の節で述べる司書資格を持つ/持たない図書館員の間で観察される差異は、性別、年齢、短大卒か四大卒か、理系か文系か以外の属性によると考えられる。先述のように我々はその差異は司書資格の有無に起因するという立場を取る。

4.2 所属と職務

以下ではまず図書館員の所属館種と従事している職務について述べ、次に一般人が従事している業種について述べる。

まず表2表側の選択肢を図書館員に示し、「あなたが勤めの図書館は次のどれですか?」とたずねてみた。結果は同じく表2のようになった。表2から例えば、司書資格を持つ図書館正職員の間では、大学図書館に勤める者の割合が30.0%であるのに対し、司書資格を持たない図書館正職員の間では同割合は12.5%にとどまることなどが分かる。全般に司書資格を持たない図書館正職員の間では、司書資格を持つ図書館正職員の間よりも、学校図書館員の割合が高い。大学図書館員については逆のことが言える。他の館種に関しては司書資格の有無に関してほとんど差は無いようである。

図書館員が従事している職務について複数回答可で尋ねたところ表3のようになった。表3から例えば司書資格を持つ図書館正職員の42.0%が児童サービスに従事していることが分かる。全般に司書資格を持つ図書館員は、持たない図書館員よりも、レファレンスサービスや分類といった専門的職務に従事する割合が高いことが確認できる。また司書資格を持たない図書館正職員は、会計や庶務といった職務に従事する割合が、相対的に高いことも分かる。

一般人の業種については表4のようになった³²⁾。表4から例えば司書資格を持たない一般人の6.3%が建設業に従事しているのに対し、司書資格を持つ一般人は1.3%しか建設業に従事していないことなどが分かる。全般

表2 勤務先の館種と身分

	司書資格を持つ 図書館員		司書資格を持たない 図書館員	
	正職員	非常勤	正職員	非常勤
公共図書館	34.0	46.0	34.4	56.5
大学図書館	30.0	37.9	12.5	32.6
学校図書館	24.0	14.9	50.0	8.7
国立国会図書館	12.0	1.1	3.1	2.2
N	50	87	32	92

表3 図書館員が従事している職務

	司書資格を持つ 図書館員		司書資格を持たない 図書館員	
	正職員	非常勤	正職員	非常勤
貸出・返却などのカウンター業務	78.0	83.9	40.6	53.3
レファレンスサービス	82.0	66.7	28.1	21.7
児童サービス	42.0	32.2	25.0	12.0
障害者サービス	20.0	6.9	3.1	5.4
高齢者サービス	14.0	5.7	0.0	3.3
図書館間協力(ILLなど)	46.0	33.3	6.3	2.2
書架整理	66.0	75.9	40.6	30.4
選書	58.0	36.8	37.5	13.0
目録作成	46.0	37.9	25.0	14.1
分類	52.0	43.7	21.9	18.5
データ入力	62.0	60.9	50.0	47.8
受入	62.0	51.7	37.5	21.7
装備	54.0	51.7	18.8	13.0
会計・庶務	34.0	11.5	40.6	6.5
経営・企画	50.0	4.6	25.0	3.3
その他	14.0	11.5	0.0	2.2
N	50	87	32	92

表4 司書資格を持つ/持たない一般人の業種

	司書資格 を持つ一 般人	司書資格 を持たない 一般人
農林水産	0.0	1.0
建設	1.3	6.3
電気	0.0	1.6
機械	2.6	2.6
自動車	2.6	2.1
電気・ガス等	0.0	1.0
運輸	2.6	3.6
医療	6.4	6.3
マスコミ	0.0	1.6
出版	5.1	3.1
書店	2.6	0.0
教育	14.1	8.3
情報(コンピュータ関連など)	16.7	8.9
金融	7.7	8.9
保険	2.6	4.7
不動産	2.6	1.0
飲食	1.3	2.6
その他製造	6.4	10.9
その他卸小売	7.7	11.5
その他	17.9	14.1
N	78	192

に司書資格を持つ者と持たない者の間に有意な差がある業種はほとんどなかった。だが書店とIT産業に関してはそれぞれ有意水準0.01, 0.05で差が見られ、司書資格を持つ者の方がこれらの業種に従事する割合が高いことが言えた。

4.3 図書館に関連した用語・概念に対する知識

以下では司書資格の有無と、図書館用語に関する知識及びデータベースに関する知識との関係を見ていく。

4.3.1 図書館用語に対する知識

図書館用語として表5表側の20語を回答者に示し、それぞれの用語について「よく知っている」「聞いたことはある」「聞いたことがない」の3段階で評価してもらった。表5にはこのうち、「聞いたことがない」と答えた者の割合(%)を示してある。表5から例えば、司書資格を持つ正職員の中で「OPAC」を「聞いたことがない」と答えた者はいない(0.0%)一方、司書資格を持たない正職員の56.3%は「聞いたことがない」と答えたことが分かる。

ここで用語のタイプについて説明したい。本研究では表5の(1)～(9)は基本的な図書館用語であり、これらの理解はあらゆる図書館員に必須と考える。表5の(10)～(13)は歴史的に重要な用語³³⁾、(14)～(15)は図書館の自由に関わる用語、(16)～(20)は近年話題になってきた用語、と考える。

さて本調査の結果、司書資格を持たない図書館員は基本的な図書館用語ですらよく知らないことが明らかとなった。「ファーマントプラン」といった歴史的用語を知らないことは仕方がないとしても、図書館の実務で必要と思われる「レファレンスサービス」「OPAC」「相互貸借」という用語に対して、彼らの半分以上が「聞いたこ

とがない」と答え、「納本制度」「書誌ユーティリティー」という用語に対しては8割近くが「聞いたことがない」と答えている現状は深刻である。司書資格を持たない図書館員よりも、司書資格を持つ一般人の方が、相対的に多くの用語を知っていることにも注意したい。もし彼らの中に図書館員になることを希望している者がいたとしたら、司書資格を持たない現在の図書館員と交代させた方が、図書館や利用者にとって有効である可能性がある。

司書資格を持つ正職員は歴史的用語に若干弱いものの、基本的な用語はよく知っており、他の用語も他の図書館員よりよく知っていた。彼らの次に用語を知っているとされるのは司書資格を持つ図書館非常勤職員であった。

先述の結果では、司書資格を持たない図書館員の半分以上が「レファレンスサービス」や「相互貸借」という用語を「聞いたことがない」と答えていた。だが彼らは単に言葉や用語を知らなかっただけで、サービスの内容や存在自体は知っていたという可能性もある。そこで、図書館で以下の2つのサービスが行われていることを知っているかもたずねてみた。即ち、(a)「書架にない本を希望すると、他の図書館から借りてきて提供してくれる

表5 各用語に関して「聞いたことがない」と答えた者の割合

	司書資格を持つ 図書館員		司書資格 を持つ 一般人	司書資格を持たない 図書館員		司書資格 を持たない 一般人
	正職員	非常勤		正職員	非常勤	
(1) レファレンスサービス	0.0	1.1	12.3	50.0	44.6	65.8
(2) OPAC	0.0	8.0	51.8	56.3	51.1	80.3
(3) ISBN	0.0	2.3	26.3	50.0	41.3	66.8
(4) 納本制度	4.0	16.1	48.2	75.0	80.4	88.3
(5) アーカイブ	2.0	6.9	10.5	25.0	22.8	27.4
(6) ILL	20.0	24.1	83.3	81.3	80.4	95.4
(7) 相互貸借	0.0	2.3	34.2	56.3	55.4	74.5
(8) 書誌ユーティリティー	10.0	21.8	59.6	75.0	79.3	88.9
(9) 酸性紙	8.0	10.3	36.8	68.8	64.1	67.7
(10) ランガナタンの図書館学5法則	28.0	23.0	71.9	81.3	92.4	97.2
(11) ファーマントプラン	58.0	75.9	86.8	87.5	91.3	96.3
(12) 中小レポート	26.0	31.0	74.6	87.5	81.5	84.9
(13) SDIサービス	38.0	60.9	78.1	81.3	81.5	93.2
(14) 図書館の自由に関する宣言	0.0	8.0	50.9	65.6	67.4	88.3
(15) 船橋市西図書館の蔵書廃棄事件	14.0	29.9	75.4	75.0	84.8	90.2
(16) 子どもの読書活動の推進に関する法律	10.0	12.6	57.0	56.3	70.7	81.5
(17) 指定管理者制度	8.0	24.1	66.7	71.9	71.7	84.0
(18) 山中湖情報創造館	32.0	75.9	90.4	90.6	90.2	95.7
(19) ドキュメントデリバリーサービス(DDS)	38.0	50.6	69.3	71.9	76.1	88.6
(20) 上級司書	32.0	34.5	52.6	71.9	65.2	69.8
N	50	87	114	32	92	325

表6 各サービスに関して「知らなかった」と答えた者の割合

	司書資格を持つ 図書館員		司書資格 を持つ 一般人	司書資格を持たない 図書館員		司書資格 を持たない 一般人
	正職員	非常勤		正職員	非常勤	
(a) 相互貸借	2.0	0.0	10.5	18.8	18.5	28.6
(b) レファレンスサービ	0.0	1.1	25.4	37.5	35.9	58.5
N	50	87	114	32	92	325

サービス」, (b) 「「PFIに関する本はあるか?」「<木天蓼>は何とよむか?」といった質問に図書館員が答えてくれるサービス」, の2つである。結果は表6のようになった。司書資格を持たない図書館員の約19%は上記(a)について「そのサービスは知らなかった」と答え、同様に約36%は(b)について「知らなかった」と答えていた。従って先ほどの結果は, 単に言葉を知らなかったからではないことが分かる。約19%や約36%といった割合は, 表5の約50%という割合に比べれば低いが, それでも満足できる値ではない。ちなみに司書資格を持つ一般人では, 上記割合はそれぞれ10.5%, 25.4%であった。従って先ほど同様, 司書資格を持つ一般人の方が, 資格を持たない図書館員よりも, 図書館サービスについて理解が高い可能性がある。

以上の結果から, 司書資格を持たない図書館員は, 図書館に関する用語や概念をあまり知らないことが明らかとなった。彼らはもっと研鑽を積む必要がある。そのような研鑽が無理なら図書館や図書館設置母体は, 司書資格を持たない者より持つ者の方を優先的に図書館に配置するといった方向を検討すべきと思われる。

4.3.2 データベースに対する知識

選択肢として表7表側の18個のデータベース等を挙げ, «次のデータベースやサイト, ベンダーのうち, 使い方をよく知っているものすべてに○印をつけて下さい»と尋ねてみた。結果は同じく表7のようになった。表7から例えば司書資格を持つ図書館正職員の24.0%が「PubMedあるいはMEDLINE」に○を付けていた一方, 司書資格を持たない図書館正職員は3.1%しか○を付けなかったことなどが分かる。

司書資格を持つ/持たない図書館正職員同士を比較す

ると, 上記○の割合は, COSMOSとTSR以外の全14個のデータベースにおいて有意水準0.01で差が見られ, 司書資格を持つ図書館正職員の方が「使い方をよく知っている」と答える割合が高いことが示された。司書資格を持つ/持たない図書館非常勤職員同士を比較すると, 上記の○の割合は6個のデータベース(雑誌記事索引, CiNii, InternetArchive, JDreamIIあるいはJOIS, PubMedあるいはMEDLINE, WebcatあるいはWebcat Plus)で同様の有意差が見られた。即ち, 司書資格を持っている図書館員は, 持っていない図書館員よりもデータベースの使い方に自信を持っていることが言える。

司書資格を持つ/持たない一般人同士で○の割合を比較すると, こちらは聞蔵, 雑誌記事索引, WebcatあるいはWebcat Plusの3個のデータベースにおいて有意水準0.01で差が見られた。これらは日本における新聞記事, 雑誌記事・論文, 図書館の代表的なデータベースであり, 司書資格は取得者にそうした文献を効率的に探す能力を与えているとすることができよう。

さて興味深いことに, 司書資格を持つ一般人と司書資格を持たない図書館員とでは, どのデータベースにおいても○の割合に有意水準0.01では差を認めることができなかった。その意味で, 司書資格を持たない図書館員のデータベース検索能力は, 司書資格を持つ一般人のそれとあまり変わらない可能性がある。先ほど表3に示した通り, 司書資格を持たない図書館員はいわゆるテクニカルサービスにのみ従事しているわけではなく, 利用者に直接接するサービスにも従事している。彼らはしばしば利用者から文献情報等を尋ねられているのではないだろうか。そのような場合に適切に対処できるよう, 少なくともCiNiiやWebcat Plusなどは使いこなせるようになっておくことが望ましい。

表7 各データベースに関して使い方をよく知っていると答えた者の割合

	司書資格を持つ 図書館員		司書資格 を持つ 一般人	司書資格を持たない 図書館員		司書資格 を持たな い一般人
	正職員	非常勤		正職員	非常勤	
日経テレコン21	44.0	20.7	7.0	6.3	13.0	7.1
朝日新聞記事データベース「聞蔵」	54.0	19.5	9.6	9.4	9.8	4.0
帝国データバンクの「COSMOS」	22.0	3.4	4.4	6.3	6.5	4.9
東京商工リサーチの「TSR」	14.0	3.4	1.8	3.1	4.3	0.9
DIALOG	22.0	5.7	2.6	0.0	2.2	1.5
JDreamIIあるいはJOIS	22.0	17.2	0.9	3.1	2.2	0.3
G-Search	18.0	6.9	3.5	3.1	3.3	4.0
@nifty	40.0	12.6	16.7	12.5	19.6	18.5
PATOLISあるいはWPI	12.0	1.1	0.9	0.0	1.1	0.6
PubMedあるいはMEDLINE	24.0	17.2	0.9	3.1	2.2	0.3
CA/CPlus/CA-SEARCH	12.0	1.1	0.0	0.0	0.0	0.0
WebcatあるいはWebcatPlus	70.0	51.7	10.5	6.3	5.4	3.1
国会図書館の雑誌記事索引	66.0	58.6	21.9	12.5	14.1	4.9
CiNii	38.0	36.8	3.5	6.3	9.8	2.5
InternetArchive	20.0	10.3	5.3	0.0	1.1	2.2
GoogleBookSearchまたはGoogleブック検 この中にはない	56.0	19.5	21.1	15.6	23.9	20.9
	6.0	17.2	53.5	59.4	39.1	60.3
N	50	87	114	32	92	325

4.4 図書館員になった理由

図書館になった理由を複数回答可で尋ねたところ表8のようになった。表8から例えば司書資格を持つ図書館正職員の30.0%が理由(2)を選んだことなどが分かる。本研究では理由(1)(2)を社会における図書館の役割を意識した理想的な就職理由であるとみなす。理由(3)～(7)は社会的視点などは持たない個人的な欲求に基づくものだが、特にネガティブということもなく中立的な理由とみなす。一方理由(8)～(12)はかなりネガティブなものとする。

全般に図書館員に最もよく選ばれる理由は(3)であったが、司書資格を持つ図書館員の間では理想的な理由(1)(2)はそれぞれ2番目3番目によく選ばれる理由であった。特に理由(1)(2)を選ぶ者の割合は、司書資格を持つ/持たない正職員の間で有意水準0.01で差が見られた。

司書資格を持たない図書館正職員に最もよく選ばれる理由は(11)「母体組織から図書館勤務を命じられたから」であった。日本ではしばしば図書館の母体組織(即ち、地方自治体や大学)が職員に対して彼らの背景やキャリア希望と無関係に図書館で働くことを命じることがある。結果、図書館で働きたくない者が図書館で働き、図書館で働きたい者が逆に働けないという事態が起きている。上記結果はこのような職員体制に由来すると思われる。ネガティブな理由(8)～(12)については、司書資格を持つ図書館員よりも司書資格を持たない図書館員によって選ばれやすい傾向が若干あった。

4.5 仕事に対するモチベーション

仕事に就いている回答者に対して、現在の仕事をどの程度続けたいかを尋ねてみた。結果は表9のようになった³⁴⁾。表9から例えば、司書資格を持つ図書館正職員/

非常勤職員のそれぞれ56.0%/59.8%が「できるだけ長く続けたい」と答えたことが分かる。これらの割合は他の4グループに比べて有意水準0.01で高い。その意味で司書資格を持つ図書館員は、自分達の仕事に対して相対的に満足していることが分かる。一方、司書資格を持たない図書館正職員の21.9%(=12.5%+9.4%)が現在の仕事を早くやめたいと答えていた。この割合は司書資格を持つ図書館員における同割合よりも有意水準0.01で高い。また統計的に有意ではないが、この割合は司書資格を持たない一般人における同割合よりも高い(15.1%=8.4%+6.7%)。その意味で、司書資格を持たない図書館正職員は現在の仕事にあまり満足していないことが分かる³⁵⁾。

図書館員が現在の仕事を続けたいと考える度合いは、その図書館員が現在提供しているサービスに依存するかもしれない。そこで司書資格を持たない図書館正職員において、表3に挙げたサービスに従事している者ごとに、仕事をやめたいと考えている者の割合を算出してみた。その割合が高かったサービスは、(1)目録作成(38%:目録作成に従事している8人中3人が仕事をやめたいと考えていた)、(2)会計・庶務(31%:同じく13人中4人)、(3)レファレンスサービス(22%:同じく9人中2人)であった。目録作成やレファレンスサービスは図書館情報学に関する専門的な知識を必要とする。もし司書資格を持たない図書館正職員が自分達の仕事に不満・憂鬱を感じているのならば、司書資格を持つ正職員の数を増やし、彼らに仕事を担当させるのが有効であろう(これらのサービスに従事している司書資格を持つ図書館正職員は特に仕事をやめたいとは思っていない)。

ちなみに表の形にはしていないが、司書資格を持つ図書館員の中で「できるだけ長く続けたい」と答えた者について表5表7の数値を調べたところ、彼らは司書資格

表8 図書館員になった理由

	司書資格を持つ図書館員		司書資格を持たない図書館員	
	正職員	非常勤	正職員	非常勤
(1) 資料と利用者をつなぐ仕事に魅力を感じたから	60.0	40.2	25.0	28.3
(2) 人類の知的遺産を後世に伝える仕事に魅力を感じた	30.0	13.8	3.1	9.8
(3) 様々な本に接することができるから	62.0	77.0	28.1	43.5
(4) 子どもが好きだから	12.0	13.8	12.5	13.0
(5) 身分が安定しているから	18.0	4.6	18.8	6.5
(6) 親が図書館員あるいは公務員で、親近感があったか	8.0	4.6	6.3	1.1
(7) 図書館員はイメージ的に格好いいから	8.0	8.0	3.1	9.8
(8) 定時に帰れそうだから	6.0	8.0	12.5	17.4
(9) 仕事が少なそうだから	2.0	1.1	6.3	4.3
(10) 人と話さないで良さそうだから	4.0	1.1	3.1	3.3
(11) 母体組織から図書館勤務を命じられたから	14.0	2.3	31.3	2.2
(12) 他の就職希望先が落ちてしまったので仕方なく	2.0	3.4	6.3	15.2
(13) その他	18.0	19.5	6.3	13.0
N	50	87	32	92

を持つ図書館員全体よりも明らかに各用語を「聞いたことがない」と答える割合が低く、また各データベースの使い方をよく知っていると答える割合が高かった。その意味で彼らは図書館に関する知識を他の者より多く持っている可能性がある。

図書館員としての能力向上に対する意欲を確かめる為に、本研究では彼らに図書館員としての知識・技能に関する検定試験や、図書館養成の為に専門職大学院にどの程度関心があるかを、それぞれ表10表11表側のような選択肢を示して尋ねてみた。結果は同じく表10表11のようになった。例えば表10から司書資格を持たない図書館正職員／非常勤職員のうち検定試験を「非常に受けたい」と答えた者はそれぞれ3.1％／10.9％にとどまる一方、司書資格を持つ図書館正職員／非常勤職員はそれぞれ36.0％／35.6％がそのように答えていることが分かる。専門職大学院については司書資格を持たない図書館正職員のうち15.6％しか「現在の仕事を続けながら通えるのであれば入学したい」と答えていないのに対し、司

書資格を持つ図書館正職員は56.0％がそのように答えている。こうした結果から、司書資格を持つ図書館員は持たない図書館員に比べて相対的に、図書館員としての能力向上に強い関心を持っていると言える。

5. 考察

これまで見てきたように、司書資格を持たない図書館員は「レファレンスサービス」や「OPAC」といった図書館関連用語をあまり知らない。いくつかの用語に関しては、彼らの知識は一般市民と変わるところがない。逆に司書資格を持つ図書館員は、正職員・非常勤職員共に、彼らより図書館関連用語をはるかによく知っている。さらに司書資格を持つ図書館員は持たない図書館員よりも、代表的データベースの使い方をよく知っている。このように司書資格を持つ図書館員の知識は、持たない図書館員よりも優れていると思われる。

仕事のモチベーションに関しては、司書資格を持つ図

表9 現在の仕事を続けたい度合い

	司書資格を持つ図書館員		司書資格を持つ一般人	司書資格を持たない図書館員		司書資格を持たない一般人
	正職員	非常勤		正職員	非常勤	
できるだけ長く続けたい	56.0	59.8	22.9	28.1	31.5	23.6
長く続けたい	24.0	18.4	12.6	34.4	23.9	21.9
どちらともいえない	20.0	16.1	51.8	15.6	32.6	39.3
早くやめたい	0.0	3.4	1.2	12.5	8.7	8.4
できるだけ早くやめたい	0.0	2.3	11.5	9.4	3.3	6.7
N	50	87	87	32	92	224

表10 図書館員としての検定試験を受けたい度合い

	司書資格を持つ図書館員		司書資格を持つ一般人	司書資格を持たない図書館員		司書資格を持たない一般人
	正職員	非常勤		正職員	非常勤	
非常に受けたい	36.0	35.6	13.2	3.1	10.9	6.2
多少受けたい	50.0	52.9	52.6	40.6	43.5	45.5
あまり受けたくない	10.0	10.3	25.4	40.6	29.3	26.5
全く受けたくない	4.0	1.1	8.8	15.6	16.3	21.8
N	50	87	114	32	92	325

表11 図書館情報学の専門職大学院に入学したい度合い

	司書資格を持つ図書館員		司書資格を持つ一般人	司書資格を持たない図書館員		司書資格を持たない一般人
	正職員	非常勤		正職員	非常勤	
現在の仕事をやめてでも入学したい	8.0	1.1	1.8	0.0	1.1	1.5
現在の仕事を続けながら通えるのであれば入学したい	56.0	48.3	26.3	15.6	25.0	16.3
どちらかといえば入学したい	20.0	28.7	24.6	15.6	22.8	18.5
どちらかといえば入学したくない	10.0	6.9	22.8	18.8	21.7	27.1
全く入学したくない	4.0	6.9	16.7	43.8	26.1	31.4
その他	2.0	8.0	7.9	6.3	3.3	5.2
N	50	87	114	32	92	325

書館員の多くが現在の仕事を続けたいと考えており、自分達の知識を向上させたいと考えていた。それに対して司書資格を持たない図書館員の少なからぬ人数が現在の仕事をやめたいと思っており、能力の向上に関心を持っていなかった。司書資格を持っていない図書館正職員は、図書館員になった理由として「母体組織から図書館勤務を命じられたから」を最も多く選んでいた。先述のように日本では図書館の母体組織が職員の経歴や希望をあまり考慮せずに図書館勤務を命じることがある。若干古い文献ではあるが馬場・横山(1976)は大学図書館227館のうち104館において図書館員が図書館以外の部署に異動させられていることを明らかにしている³⁶⁾。鈴木(1998)は司書資格の有無に拘わらず大学図書館員が図書館以外の部署に異動させられているかを調べ、1989年では734館中396館(54.0%)において、1995年では902館中546館(60.5%)においてそのような異動が行われていることを明らかにしている³⁷⁾。だが図書館員の知識に関する先述の結果と、図書館での仕事を長く続けたいと思う度合いの結果とが示しているように、司書資格を持つの方が持たない者よりも熱意と知識を持っている。そのような者を図書館に優先的に配置した方が図書館にとっても母体組織にとっても有効なのではないだろうか。

6. おわりに

司書資格の有効性を調べる目的で、本研究では司書資格を持つ／持たない者に対するアンケート調査を行った。結果、司書資格を持つ図書館員は図書館関連用語やデータベースの使い方をよく知っており、仕事に対するモチベーションが高かったのに対し、司書資格を持たない図書館員は図書館に関連する非常に基礎的な用語すら知らず、モチベーションもしばしば低いことが数量的に明らかとなった。図書館に関する知識とモチベーションが高い者の方が良質の図書館サービスを生む可能性が高いことを考えれば、図書館あるいはその母体組織は司書資格を持つ者を図書館に配置するのが有効と言える。

最後に本研究では様々な館種の図書館員が調査サンプルに含まれていた。館種によって図書館員の傾向が異なる可能性があるため、今後は館種別の集計に耐えるような多くのサンプルを集め、同様の調査を行いたい。またインタビュー調査など、本研究が用いたインターネット調査以外の手法も採用し、司書資格の有効性を示したい。

注及び引用文献

- 1) 日本図書館協会図書館調査事業委員会編『日本の図書館2009:統計と名簿』日本図書館協会, 2010, 598p.
- 2) 三輪眞木子ら「大学における司書・司書教諭教育の実態」『2005年度日本図書館情報学会春季研究集会発表要綱』2005, p.39-42.
- 3) 辻慶太ら「司書資格取得者に対する追跡調査:仕事・満足度を中心として」『図書館界』60(3), 2008, p.166-179.
- 4) 本研究では主に(a)と(c)の比較,(b)と(d)の比較を行う。即ち、図書館員になった／ならなかった人々において、司書資格を持つ者／持たない者にどのような違いが見られるかを調べる。もちろん結果として観察された違いは、司書資格の取得がもたらしたのではなく、それぞれのグループに何らかの属性上の差異が元々あって、その差異が違いをもたらしたという可能性を捨てることはできない。従って本研究の目的を達成する調査方法としては、図書館員を目指している大学生などを集めて2つのグループに分け、一方に司書資格を取得させ、他方には取得させず、図書館員になった後にどのような違いが見られたかを観察するといった方法の方が適切である。だがそうした調査方法には「司書資格を取得したいと考えている人に取得させない」といった倫理的な問題があり、またコストもかかることを考えて、本研究では採用しなかった。
- 5) 司書資格は公共図書館員の資格であることを考えれば、本研究ではアンケート回答者を公共図書館員に限定すべきだったかもしれない。だが(1)公共図書館員だけで十分なサンプルを得るのが予算的に難しかったこと,(2)他館種の図書館の仕事内容は公共図書館と共通する部分も多く、司書資格がもたらす知識はそれら図書館でも有用と思われること、の2点から公共図書館以外の図書館員も調査対象とした。
- 6) 国立教育政策研究所社会教育実践研究センター編『図書館及び図書館司書の実態に関する調査研究報告書:日本の図書館はどこまで「望ましい基準」に近づいたか』国立教育政策研究所社会教育実践研究センター, 2004, 126p.
- 7) 前田秀樹「大阪の公立図書館職員実態調査から-1-高司書率の内実をさぐる」『月刊社会教育』29(6), 1985, p.66-75.

- 8) 前田秀樹「大阪の公立図書館職員実態調査から -2- 司書職制度はどこまで進んでいるか」『月刊社会教育』29 (7), 1985, p.62-68.
- 9) 柴田正美「これからの図書館学教育: 大学における図書館学教育と専門性」『みんなの図書館』(202), 1994, p.13-18.
- 10) 前川恒雄「司書養成教育と図書館学」『図書館界』47 (3), 1995, p.106-110.
- 11) 朝比奈大作「司書課程の教育内容: 新時代の司書養成を目指して」『現代の図書館』39 (1), 2001, p.4-9.
- 12) 大城善盛「21世紀の大学図書館に求められる司書の能力とわが国の大学図書館司書の養成」『現代の図書館』39 (1), 2001, p.31-37.
- 13) 阪田蓉子「司書養成と司書課程」『図書館文化史研究』(19), 2002, p.111-131.
- 14) 根本彰「日本の図書館員養成と LIPER の課題」『図書館雑誌』98 (12), 2004, p.895-897.
- 15) Miwa, Makiko et al. "Final Results of the LIPER Project in Japan," *Proceedings of the World Library and Information Congress : 72nd IFLA General Conference and Council*, "Libraries : Dynamic Engines for the Knowledge and Information Society," 2006, <<http://www.ifla.org/IV/ifla72/papers/107-Miwa-en.pdf>>. [引用日: 2010-07-16].
- 16) Ueda, Shuichi et al. "LIPER (Library and Information Professions and Education Renewal) Project in Japan," *Proceedings of the World Library and Information Congress : 71th IFLA General Conference and Council "Libraries - A Voyage of Discovery"*, 2005, <<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jslis/liper/report06/ifla-051e.pdf>>. [引用日: 2010-07-16].
- 17) 上田修一ほか『LIPER 報告書』, 2006, <<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jslis/liper/report06/report.htm>>. [引用日: 2010-07-16].
- 18) 辻ら, 前掲 3).
- 19) 萩原雅之「インターネット調査の現状と課題」『社会情報』Vol.11, No.1, 2001, p.129-137.
- 20) 本多則恵, 本川明『インターネット調査は社会調査に利用できるか: 実験調査による検証結果(労働政策研究報告書: No.17)』労働政策研究・研修機構, 2005, 369p.
- 21) Ohsumi, Noboru and Yoshimura, Osamu "The Online Survey in Japan : An Evaluation of Emerging Methodologies," *Bulletin of the International Statistical Institute 52nd Session, Book2*, 1999, p.171-174.
- 22) 吉村宰「インターネット調査にみられる回答者像, その特性」『統計数理』Vol.49, No.1, 2001, p.223-229.
- 23) 大隅昇「インターネット調査の適用可能性と限界: データ科学の視点からの考察」『行動計量学』Vol.29, No.1, 2002, p.20-44.
- 24) 本多・本川, 前掲 20).
- 25) 大隅, 前掲 23).
- 26) 内田哲郎「日本のリサーチ業界事情 第28回経營業務実態調査結果報告 調査事業売上高の増加維持: インターネット調査が急増, 環境変化に拍車」『マーケティング・リサーチャー』Vol.97, 2004, p.63-81.
- 27) 森田一三ら「インターネット調査による歯科に関する用語の認知と個人属性の関係」『口腔衛生学会雑誌』Vol.53, No.3, 2003, p.211-220.
- 28) 大野重昭ら「Web アンケートを用いた「眼のかゆみ」に関する実態調査」『アレルギー・免疫』Vol.11, No.12, 2004, p.1636-1646.
- 29) Yahoo! リサーチ, <<http://research.yahoo.co.jp/>>. [引用日: 2010-07-16].
- 30) 司書資格を取得したコースがいわゆる司書課程だったか司書講習だったかは本研究では区別していない。図書館員にならなかった回答者にとって, そのような区別は難しいと考えた為である。
- 31) 理系・文系の別に関しては, 理学・工学・農学・医学薬学を前者, それ以外を後者とした。
- 32) 表 4 は別の質問において会社員, 公務員, 自営業, 自由業, アルバイト・パートのいずれかを選んだ者に尋ねた結果である。その質問で「その他」及び「専業主婦・主夫」「学生」「無職」を選んだ者には尋ねていない。その為全回答者数は表 1 と異なっている。
- 33) 「SDI サービス」を実現している図書館は少なく, また実現していたとしてもこのような表現はもはや用いていないと考え, 歴史的用語に分類した。
- 34) 見やすさを考え「現在働いていない」という選択肢を選んだ者は表には挙げなかった。その為全回答者数は他の表と異なっている。表 4 と合計が異なるのは, 働いていながら注 32 で述べた「その他」を選んだ者がこの表には含まれる為である。
- 35) 館種別に見ると司書資格を持っていない大学図書館員と公共図書館員に仕事をやめたいと答える者が多かった。資格を持っていない大学図書館正職員 4 人

のうち 2 人が、同じく資格を持っていない公共図書館正職員 11 人のうち 3 人が、仕事をやめたいと答えていた。

- 36) 馬場俊明, 横山桂「大学図書館における司書の処遇について：実態調査およびその分析結果 2」『図書館雑誌』70 (3), 1976, p.94-95.

- 37) 鈴木正紀「私立大学図書館員の「異動」に関する覚え書き：大学職員の専門性と大学図書館員」『図書館雑誌』92 (12), 1998, p.1059-1061.

(平成 22 年 3 月 26 日受付)

(平成 22 年 7 月 5 日採録)